

HPV ワクチンについての Q&A



Q.HPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンの効果はなんですか？また、効果はどれくらい続きますか？

A. HPV ワクチンを接種することにより、HPV 感染※や子宮頸がん、前がん病変を予防することができます。接種後の抗体価の推移から、ワクチンの有効期間は 30 年以上続くと考えられています。

※HPV 感染は、子宮頸がんのほか、コンジローマ(良性のイボ)や外陰がん、肛門がん、中咽頭がんの原因となります。

Q. HPVワクチン接種はどのようなものですか？

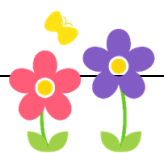
A. 小学校6年～高校1年相当の女子は、予防接種法に基づく定期接種として、公費によりHPVワクチンを接種することができます。

また、平成9年度生まれ～平成20年度生まれ(誕生日が1997年4月2日～2009年4月1日)の女性で、令和4年4月1日～令和7年3月31日までの間にHPVワクチンを1回以上受けた方は、令和8年3月31日までの間に、残りの接種を公費で受けることが可能です。

Q. HPVワクチンにはいくつか種類があるようですが、どう違うのでしょうか？

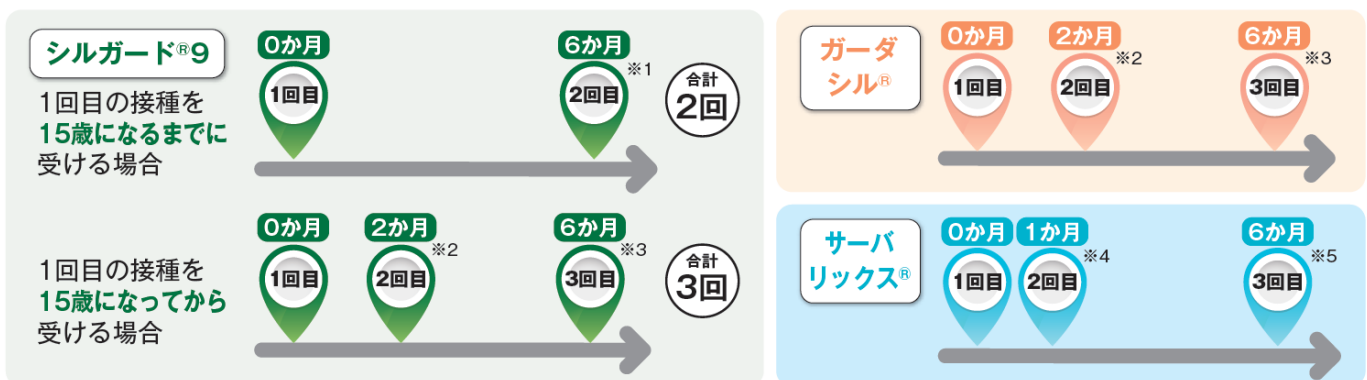
A. 子宮頸がんはヒトパピローマウイルス(HPV)というウイルスの感染で起こります。HPV は20種類以上あり、子宮頸がんを引き起こす高リスク型と良性腫瘍を引き起こす低リスク型があります。

ワクチン名		予防効果のある型	特徴
サーバリックス	2価	16・18型:高リスク型 (子宮頸がんにおける感染率 65.4%)	子宮頸がんを引き起こす高リスク型に効果がある。
ガーダシル	4価	6・11型:低リスク型 16・18型:高リスク型 (子宮頸がんにおける感染率 65.4%)	子宮頸がんを引き起こす高リスク型と良性腫瘍を引き起こす低リスク型に効果がある。
シルガード	9価	6・11型:低リスク型 16・18・31・33・45・52・58 型 :高リスク型 (子宮頸がんにおける感染率 88.2%)	子宮頸がんを引き起こす高リスク型と良性腫瘍を引き起こす低リスク型に効果がある。



Q.HPVワクチンは何回接種すればよいですか？

A. HPVワクチンは、合計2回または3回接種します。接種するワクチンや年齢によって、接種のタイミングや回数が異なります。



3種類いずれも、1年以内に接種を終えることが望ましい。

※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2・3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※2)、3回目は2回目から3か月以上(※3)あけます。

※4・5 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の1か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※4)、3回目は1回目から5か月以上、2回目から2か月半以上(※5)あけます。

Q. 通常の定期接種の対象年齢(高校1年相当まで)を過ぎても、接種の効果はありますか？

A. 16歳頃までに接種するのが最も効果が高いですが、それ以上の年齢で接種しても、ある程度の有効性があることが、国内外の研究で示されています(※)。なお、定期接種の対象年齢を過ぎてからの接種について、明らかな安全性の懸念は示されていません。

また、子宮頸がんの予防のためには、子宮頸がん検診を定期的に受診することも大切です。検診を定期的に受けることで、がんの早期発見・早期治療につながります。さらに、HPV感染は主に性的接触により起こるため、パートナーとともに性感染症の予防も忘れずに行いましょう。

(※) ワクチンが子宮病変を予防する有効性はおおむね16歳以下の接種で最も高いものの、20歳頃の初回接種まではある程度有効性が保たれることや、性交経験がない場合はそれ以上の年齢についても一定程度の有効性があることが示されています。性交経験によるHPV感染によって、ワクチンの予防効果が減少することが示されていますが、性交経験がある場合でも、ワクチンの予防効果がなくなってしまうわけではありません。HPVワクチンの対象年齢を過ぎてからの接種の有効性などに関するエビデンスについて、厚生労働書ホームページより以下の資料をご参照ください。

【参考資料】第26回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会 資料5-1「HPVワクチンのキャッチアップ接種に関する有効性・安全性のエビデンスについて」

Q. 定期接種の対象年齢(高校1年相当まで)を過ぎても、過去にHPVワクチンを1回または2回接種した場合にも、残りの回数を公費で受けられますか？

A. 平成9年度生まれ～平成20年度生まれ(誕生日が1997年4月2日～2009年4月1日)の女性で、令和4年4月1日～令和7年3月31日までの間にHPVワクチンを1回以上受けた方は、令和8年3月31日までの間に、残りの接種を公費で受けることが可能です。

Q. HPV ワクチンは接種しなくても、毎年子宮頸がん検診を受ければ、早期発見ができますか？

A. 検診(細胞診)を行った場合、子宮頸がんや前がん病変を有する人が検診で陽性を示す割合は、研究によって差はありますが、50～70%と十分に高いとは言えません。特に妊娠中の病変や、若年層に多い腺がんは、見逃される可能性があると言われてしています。

また、前がん病変や初期のがんのうちに発見されれば、手術によりがんを治せる可能性は高いですが、手術の影響で、子宮の入り口(頸管)が細くなったり閉じてしまうことや、その後の妊娠時に早産になってしまうなどのリスクがあります。

子宮頸がんのなかには、ワクチンで防げない種類のウイルスによるものもあるため、20歳を過ぎたら子宮頸がん検診を受けることも大切です。子宮頸がんの根本的な原因となる HPV 感染そのものをワクチンによってブロックして、がんにならないようにすること、検診によりがんの早期発見をすることの両方が大切なのです。

Q. 海外での HPV ワクチンの接種状況を教えてください。

A. 世界の先進国における接種率は、北欧やオーストラリアでは特に高く(80%以上)、韓国では約70%、アメリカでは約60%となっております。日本では積極的勧奨を控えていた時期では1%以下という低い接種率でした。(令和2年からリーフレット等の個別通知を実施する自治体もあり、令和3年度は約10%という状況でした。)

ワクチンを接種する人が増え、社会の中で HPV ワクチンに対する免疫を持っている人が増えると、その感染症が自然に抑え込まれていく「集団免疫」という効果も期待できます。

Q. 副反応について教えてください。

A. HPVワクチンは新型コロナウイルスワクチンと同様に筋肉注射です。接種後に見られる主な副反応としては、発熱や接種した部位の痛みや腫れ、注射による痛み、不安などをきっかけにした失神などがあります。

多くの場合、症状は短期間で軽快します。横になって接種をしたり、緊張を和らげるような動作も有効です。

また、ワクチンを受けた方に、広範囲に広がる痛みや手足の動かしにくさ、不随意運動(動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまう)等を中心とする多様な症状が出現することが報告されていますが、頻度は非常にまれです。身体症状はあるものの、画像診断や血液検査の結果では、異常が見つからない状態(機能性身体症状)であることが多く、「異常なし」と言われることに不安を感じる方もいらっしゃると思いますが、接種直後の痛みなどと同様にワクチン接種の不安などのストレスに関連した反応と考えられ、他のワクチンでも報告があります。なお、同様の多様な症状は、ワクチンを接種していない方においても一定数存在するということが明らかになっています。

ワクチン接種後に気になる症状が出現した際には、かかりつけ医にご相談ください。原因となる異常がないか確認することが必要です。異常がなかった場合(機能性身体症状)、多くの方は時間の経過とともに症状が軽快・消失すると言われています。話を聞いてもらったり、診察や検査の結果についての説明を受けることで症状に対する不安等を軽減することも、症状の緩和のために大切です。

また、軽い運動なども効果的と言われています。なかなか改善しない場合には、厚生労働省が指定している予防接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関がありますので、かかりつけ医にご相談ください。

接種を受ける方が、納得し、不安なく接種を受けていただくことも大切です。接種を迷われている場合の相談窓口として、かかりつけ医はもちろん、牛久市保健センターもご利用ください。

Q.子宮頸がん予防接種の積極的勧奨を控えることになったのは、接種後に重い副反応が出た方がいたからだと聞きました。実際に重い副反応が出た方はいるのでしょうか。その症状について教えてください。

A. 実際に中学生の時に接種をして以来、全身の脱力感や関節痛、歩行障害などの症状に9年間苦しんでいる方がいらっしゃいます。厚生労働省が指定した協力医療機関を含め、さまざまな医療機関にかかりましたが、現在も治っていません。その方は、障害認定を受け予防接種健康被害救済制度を利用して生活しています。

一方で、積極的勧奨の差し控えから9年の間に、HPVワクチンの安全性・有効性に関して、国内外で様々な研究が行われました。HPVワクチンの安全性について特段の懸念が認められないことや、接種による有効性が副反応のリスクを明らかに上回ると認められ、接種後に生じた多様な症状に関わる診療体制が整えられたため、令和4年4月より積極的勧奨が再開しました。子宮頸がんは若い方でも発症し、早期発見で命が助かったとしても、子どもが産めなくなったり、治療の副作用に長期間苦しむことのある恐ろしい病気です。

HPV ワクチンの効果とリスクについて十分に理解した上で、接種をご検討ください。

牛久市保健センターでは接種を迷う方のご相談も受け付けておりますので、お気軽にご連絡ください。

<参考文献・資料>

1. 日本産婦人科学会ホームページ

https://www.jsog.or.jp/modules/jsogpolicy/index.php?content_id=4

2. 第31回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会、平成29年度第9回薬事・食品衛生審議会医薬品等安全対策部会安全対策調査会(合同開催) 資料 (資料17HPV ワクチンの有効性について)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000186285.html>

3. 厚労省ホームページ HPV ワクチンに関する Q&A

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/hpv_qa.html

4. んパピ みんなで知ろう HPV プロジェクトホームページ

<https://minpapi.jp/>

5. MSD Connect 子宮頸がんとHPV 感染

<http://www.msconnect.jp/products/gardasil-silgard9/column/cause/#hvpSection>

